

エッジワースのマーシャルの『経済学原理』に対する評価：
限界革命期の不均衡論の視点から

明治学院大学 中野聡子

経済学史上、1870年代の限界効用理論の同時的展開を限界革命と呼ぶ。この限界革命についての解釈と評価については、諸説ある。現代の消費者行動分析の出現としてとらえるもの、極大化行動分析という数理的手法の登場に力点をおくもの、古典派の「富の学」から新古典派の「交換理論」への分析視角のシフトとみるもの、あるいは部分均衡を含みながらも一般均衡を軸とする市場均衡分析の成立としてとらえるものなどである。また、イギリス、フランス、オーストリーで同時的に展開されたが、それぞれの文脈や内容の異質性に注目する解釈もある。

本論文では、イギリスのW.S. ジェヴォンズ、F.I. エッジワース、A. マーシャルがどのようなアプローチを念頭において、限界効用理論および市場均衡理論を構想したかという点に注目する。既存の一般的解釈は次のようなものである。ジェヴォンズは限界効用理論の展開に力点をおくが、需要関数や需要曲線概念を展開せず、体系的な市場均衡の構築に失敗している。エッジワースは、ジェヴォンズの交換理論のもつ不決定性の問題と市場均衡の橋渡しをするロジックを、現代の協力ゲームに通じる視点から構想した。マーシャルは、ジェヴォンズの効用理論に力点をおく議論を批判し、部分均衡の枠組みのなかで、需要サイドと供給サイドが相まって市場均衡が決定される分析装置を体系化した。このマーシャルの体系は、長期と短期を軸とする期間分析を取り入れることによって、時間を通じた費用構造の調整過程を市場均衡の枠の中で明らかにした。現代の価格理論は、ワルラス流の一般均衡理論の相互依存性とマーシャルの期間分析の理論構造を折衷的に取り入れていた均衡論的アプローチを軸としている。さらに、マーシャルは、収穫逓増の問題を視野にいれることによって、市場の失敗の問題を市場均衡の分析の延長上に取り込んでいる。その意味でマーシャルの『経済学原理』は、現代のミクロ経済学の内容を決定づけたといっても過言ではない。そして、上の一般的解釈は、現代のミクロ経済学の構成をもとに、3者の貢献を評価している。この評価は、それぞれの意図に忠実であろうか？この評価において、

ジェヴォンズ、エッジワースが積極的に視野に入れる個別の主体間の交換や交渉の問題に、協力ゲーム理論の観点を取り入れられている点は特徴的だがⁱ、マーシャルとの関係で根本的な対立を見出すわけではない。

ジェヴォンズとエッジワースは、1870年当初から『経済学原理』の公刊にむけて、一様にマーシャル的なアプローチをめざして、理論展開を構想していただろうか？ジェヴォンズについては、この疑問は否定的となる。両者は互いに、効用論の占める割合と意義については対立的である。ジェヴォンズが効用論を強調したのに対して、マーシャルはジェヴォンズの『経済学の理論』に対する書評論文で酷評したⁱⁱ。そして、自身の『経済学の原理』のなかで、効用サイドと費用サイドの対照的な取扱いを強調し、また厚生比較についても消費者余剰を効用に代えて考案した。そして人間の欲望よりも生産活動を通じた生活基準の変化を、長期的な視点では重視した。さらに、ジェヴォンズとマーシャルの対立は、限界効用理論の先鞭をつけたのがどちらかということについての感情的な対立や、限界効用理論の有用性の比重の置き方の問題だけでは、片づけられないポイントを含むことが、近年の研究で示唆されつつある。つまり、ソートンの不均衡論に対してどのようなスタンスをとるかということについて、ジェヴォンズとマーシャルでは根本的な対立があるⁱⁱⁱ。

エッジワースが、功利主義とジェヴォンズの経済学の影響下にあることは知られているが、彼が経済学史上、マーシャルとどのような関係にあるかはあまり明確ではない^{iv}。エッジワースの統計学を含む大量の論文は、一部分しか評価されておらず、全体として彼の経済学史上の位置づけは定まらぬ部分がある^v。というのも、エッジワースの論文は、テクニカルにも内容的にも高度な洞察を含み、エッジワースの極限定理に代表されるように、綿密な数理分析を通じて初めてその真価があらわれる。そのため、従来の経済学史の分析対象の射程範囲をこえている。しかし、マーシャルの『経済学原理』のかげにあって、エッジワースは、エコノミック ジャーナルの編集を続け、現代につながる統計学および数理経済学の分析の諸相をささえていた。その諸相を、エッジワースがどのような経済学のアプローチを念頭において展開していたかを勘案して、今後評価していくことが必要である。

その第一歩として、次の点を問題にしたい。エッジワースはマーシャルの『経済学原理』

のアプローチをどう評価していたのであろうか？エッジワースが、文字通りジェヴォンズの分析を継承しているとは言い難いが、ジェヴォンズとエッジワースは、マーシャル流のアプローチと異なるものを目指していたのではないか？あるいは、少なくともエッジワースは、ジェヴォンズのアプローチのもつ可能性を視野にいれながら、マーシャルの分析を批判的に受容していたのではないか？この点を明確にすることは、エッジワース評価の重要な視点となりうる。そこで、本稿は、エッジワースとマーシャルの間で限界効用理論に端を発する市場分析の方向性をめぐって対立があり、それがマーシャルの『経済学原理』に対するエッジワースの書評論文に表れていることを示す。

エッジワースは、マーシャルの『経済学原理』に対して、4本の書評論文を執筆している。まず、初版に対する書評が2本、第2版に対するもの1本、第3版にたいするもの1本の合計4本である。いかに、エッジワースが、マーシャルの『経済学原理』に対する評価に周到に取り組んでいたかが推察される。第2版と第3版にたいする書評は、それぞれ1891年と1895年にエコノミック・ジャーナルに掲載され、自選した自分の論文集に復刻されている。他方、初版に対する書評は、*Nature* 1890 August 14 と *The Academy* 1890 August 30 に掲載され、Newman の編集した論文集 Newman (2003) が出るまで復刻されていない。Newman (1990a) は、エッジワースのマーシャルの『経済学原理』に対する書評について、言及している。

「エッジワースは、『経済学原理』の出版を喜び、2つの別の書評を書くほどであった。この新しい「夜明けの光」に対してともに高い賞賛を送っている。(ただし、完全に無条件な賞賛ではないが) さらに、マーシャルが、エッジワースの著作についてほんの少ししか言及しないのを知って、エッジワースはショックを受けたに違いなかった。『経済学原理』の151と152ページの二つの脚注で、『数理心理学』(1881)と『倫理学の新旧の方法』(1877)にでてくる功利計算について、言及されているだけだった。」
(Newman (1990a), p. 263.)

このように、エッジワースの落胆と若干の批判が言及されているが、基本的には、賛辞であると解釈されている。

しかし注意深くチェックすると、驚くべきことに、この4本の書評の内容は、重なりあう部分があるものの、主旨はそれぞれ異なるものである。特に注目すべきは、初版に対する2本は、わずか2週間しか隔てていないにもかかわらず、まったく異なる書評になっている点である。初版の最初の書評が *Nature* に出されてから、*The Academy* に出るまでの間に、マーシャルとエッジワースの間で手紙ないし直接の議論が展開されたことが、推察され^{vi}、それによって大きく評価が変わっていることがうかがわれる。そして、マーシャルの『経済学原理』の第2版以降の改訂の方針が、エッジワースの書評の内容によって反映されていることがわかる。この『経済学原理』めぐる、エッジワースの評価の意味を検討し、以下明らかにしたい。

内容を要約すれば以下のようなようである。ジェヴォンズ、エッジワース、マーシャルの間で、市場のメカニズムの分析の問題性を、天体の惑星間の力学的相互作用、つまり多体問題の例で表現するアナロジーが使われていた^{vii}。この多体問題とは、惑星間で時間を通じて重力が複雑な相互作用を及ぼすプロセスのことで、3体以上の分析は複雑で当時まだ明確に分析されていなかった。このアナロジーを書評で多用することで、エッジワースは次の視点を考慮していた。市場の相互作用をマーシャルのように需給均衡分析のかたちで体系化することは重要な第1歩である。ただし、マーシャルのように集計されたシンメトリカルな需給均衡だけに単純化するべきではなく、個別の経済主体間の複雑な相互作用のある不均衡過程を考慮すべきである。実際、エッジワースの協力ゲームにつながる分析は、この不均衡過程のプロセスのコンストラクションになっている。

エッジワースは、このような不均衡過程を考慮に入れたジェヴォンズ流のアプローチを「産業の力学」と称し、最初の書評で、マーシャルの『経済学原理』を、それをもっとも周到に推し進めていると賛辞を述べた。その際、『経済学原理』の労働市場を扱った章に出てくる比較的目立たない多体問題に関連する叙述を、エッジワースはわざわざ引用し、均衡分析の先に不均衡分析があるかのような評価をあたえた。ところが、2週間後に出た書評

では、その評価を退け、マーシャルが、ジェヴォンズの『経済学の理論』の書評で用いた、多体問題の表現を引用したうえで、マーシャルが『経済学原理』出版以前に、その視点からの問題意識を持っていたのではないかということ、感情的な不満を抑えながら、示唆していることがわかる。その結果、マーシャルは、翌年に出版された『経済学原理』第2版から、エッジワースが引用した多体問題に関連する引用を削除した。それを受けて、エッジワースは、第2版の書評では、それを削除するべきではないということを述べたうえで、マーシャルは、複雑な不均衡過程の数理分析を構築する方向性をやめ、有機的成長というような力学的ではない表現をするようになったと評価した。エッジワースは、表面的にはマーシャルの均衡理論の構成を受け入れる形で評価しながらも、マーシャルの議論の展開を批判的にとらえている。特に、マーシャルの収穫逓増問題の課税・補助金政策は、市場の自由放任が最適であるという考え方に歯止めをかけた点で重要な視点であるが、その分析的基礎が、競争市場との関係で不明確で、ある種のごまかしに傾いているという否定的な評価になっている。

これらの経緯は、以下の含意を示唆する。ジェヴォンズとエッジワースは、現代のミクロ経済学の均衡論的アプローチと異なる不均衡過程へのアプローチを構想する視点を有していた。しかも、その視点からの『経済学原理』に対する評価を、マーシャルは拒否し、第2版以降、関連する議論を削除していたということである。Negishi (1986) はソートンの不均衡理論の存在を指摘し、Nakano (2009) は、ジェヴォンズも不均衡アプローチの視点を共有していたことを指摘した。それに加えて、本稿は、エッジワースも同様の視点を持っていたとする解釈を含意するものである。イギリスの限界革命期に不均衡理論のアプローチを模索する視点が、存在していたことになる。そして、マーシャルも、部分的にそれに理解を示していたが、『経済学原理』第2版以降そのアプローチと決別しているといえよう。ここに、マーシャルの伝統下で、大著をまとめることなく、個別の論文を大量に執筆していったエッジワースの研究計画の意図が垣間見られる。現代経済学にさまざまな形で浸透しているエッジワースの影響の意味を、本稿の視点から解釈しなおす必要があるだろう。

i 最初にゲーム理論の観点から、エッジワースを議論したのは、M. Shubik (1959) であることが、*New Palgrave* の Edgeworth の項目を書いている Newman によって指摘されている。極限定理としての分析は、Scarf (1962), Scarf and Debreu(1963), Aumann (1964)である。Newman (1987), p.96-97 を参照されたい。

ii Marshall(1872) 参照されたい。

iii Negishi (1986) によって、限界革命期直前にミルの需給法則批判を不均衡理論の観点から、W. ソーントンが展開したことが明らかにされた。その後、この解釈をめぐって、経済学史研究者の論争が巻き起こった。Nakano(2009)を参照されたい。また、Nakano(2009)は、これまでの解釈と異なり、ジェヴォンズが、ソーントンの批判を考慮して、不均衡過程の取引プロセスのマイクロ分析を試みようとしていたことを主張した。

iv Newman は、基本的に、エッジワースはマーシャルの傘のなかにいて、何年も著名な同時代人の作品のコメンテーターの役割を果たしていたとみている。Newman(1990b),p.130.

v 新古典派経済学の視点からは、Creedy(1986) がある。Mirowsky(1994)の序文での評価は、マーシャルとの対立、ソーントンとの関係を含めて、新しい視点を示唆している。Barbe(2010)は、エッジワースの伝記について、より詳しい内容が明らかにした。

vi 実際、マーシャルの「回想」のなかで、エッジワースは、『経済学原理』が出版された 1890 年、私の手紙は、著者に対して注がれた批判のほとぼりで膨れ上がった。」と述べている。Edgeworth(1956), p.68.

vii ジェヴォンズの場合は、より直截的に、惑星と重力の関係を、経済主体と効用に置き換え、惑星間の重力の相互作用が動的に複雑であることから、経済主体間の交換取引の時間を通じた挙動も同様の複雑性を有することを念頭に置いている。Jevons(1924).p.759-60.および Nakano(2009) p.177.を参照されたい。マーシャルの場合は、ジェヴォンズが需要サイドだけを重視したことに対する反論として、惑星間の相互依存を需要と供給の相互決定性の意味で用いているように見える。Marshall(1872) p.94-95.を参照されたい。エッジワースの場合は、マーシャルの需給均衡分析をみとめつつ、正常均衡が定常状態にならない可能性、つまり不均衡プロセスが均衡点を変化させていく問題を指しているように見える。エッジワースについては、この論文の以下で論じる。

Edgeworth, F.Y. (1890a) “Principles of Economics”, in Newman(2003), p.560-566,
originally in *Nature*, 42, (14 August), pp.362-4.

(1890b) “Principles of Economics”, in Newman(2003), p.566-572,
originally in *The Academy*, No.956, (30 August), pp.164-5.

(1891) “Principles of Economics”, *The Economic Journal*, Vol.1, No.3,
September , pp.611-617, reprinted in Edgeworth(1925), p.7-14.

(1895) “Principles of Economics, Third edition”, in Edgeworth (1925),
vol.3.p64-68., originally in *The Economic Journal*,1895

Marshall, A. (1890) *Principles of Economics*, first edition, New York, Macmillan and Co.

Nakano, S. (2009) “Jevons’s market view through the dynamic trajectories of bilateral exchanges: a radical vision without the demand function,” In *A History of Economic Theory*, edited by Ikeo, A. and Kurz H.D., Routledge.

Negishi, T. (1986) “Thornton’s criticism of equilibrium theory and Mill”, *History of Political Economy*, 21(4), pp.593-600.

Newman, P. (1990a) “The Great Barter Controversy”, In J. Whitaker ed., *The Early Economic Writing of Alfred Marshall*, Vol.2, p.258-277, New York, Free Press.